

福井県文書館講演

乱世に義を貫く－名将大谷吉継の実像－

外岡 慎一郎*

はじめに

1. 描かれた吉継
2. 記しのこされた吉継
3. 一次資料から見た吉継
4. 秀吉政権のなかの大谷吉継
5. 関ヶ原合戦への道
6. 関ヶ原合戦
7. 大谷吉継の死はどのように伝えられたか

はじめに

外岡でございます。今日はよろしく申し上げます。本当にたくさん来ていただきまして、見廻しますと、ご遠方から来られている方もいらっしゃるかと思います。どうもありがとうございます。私は敦賀市立博物館に移りましてから、「吉継カフェ」というものを3ヶ月に1回実施しております。いろいろ吉継について、つきないテーマをかなりマニアックに語っています。ついこの間、7月11日に6回目を行いました。その時おいでになった方の顔もお見受けしますので、本当にありがたく思っております。

1. 描かれた吉継

「乱世に義を貫く」のきれいなポスターを作っていただきありがとうございます。そのポスターに使われておりましたが、敦賀市立博物館所蔵の「関ヶ原合戦図屏風」(写真1)です。これをトリミングしてポスター、チラシを作りました。いわゆる六曲一双といってそれぞれ六つ折の屏風が左右一対になっています。むかって左側に置かれる屏風(左隻)には主に東軍、徳川家康らの軍勢が描かれています。そして、右側の屏風(右隻)の方に

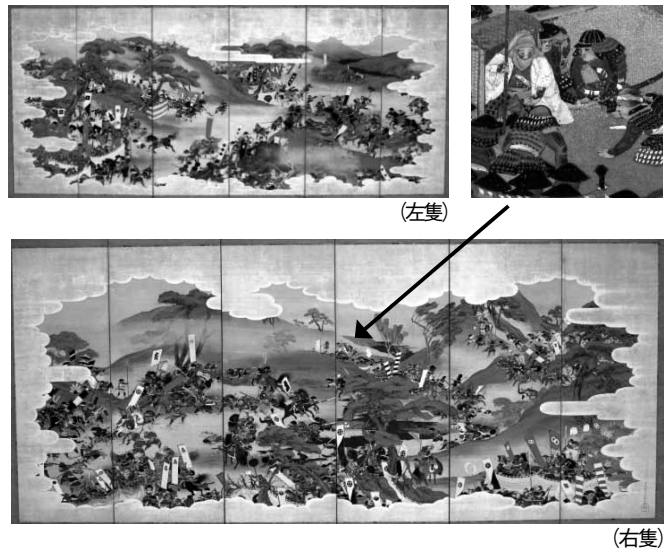


写真1 「関ヶ原合戦図屏風」

敦賀市立博物館所蔵

*敦賀市立博物館館長

は主に西軍の軍勢が描かれています。そして、大谷はここ（右隻上方）に極めて小さく描かれています。「関ヶ原合戦図屏風」というのは、いろいろな所の、いろいろな人が、いろいろな描き方で描いたものが全国に何点とあり、絵巻物もあわせるとかなりの数があるのですが、もしその中に吉継が描かれるとしますと、基本的にこのスタイルです。まず、馬に乗って槍を持って戦っているという姿は出てまいりません。なぜかということはおいおい申し上げますが、「関ヶ原合戦図屏風」には必ずこういう姿で吉継が描かれています。武将としての吉継のイメージというものがまずこういう絵で示されるということを最初に確認していただけるかなということでご紹介しました。

描かれたのはちょうど今から160年ほど前、安政元年、1854年の作ですので、大変色もきれいに残っておりまして、見栄えのする屏風でございます。作者は江戸時代の幕末から明治の前半期を生きた菊池容斎という絵師です。『前賢故実』^{ぜんけんこじつ}という、歴史上の人物の肖像画を集めた作品が大変好評でよく知られています。歴史画を大変得意とした絵師でございますが、残念ながら誰の注文で、どういう事情で「関ヶ原合戦図屏風」が描かれたかということはほとんどわかっておりません。安政元年といえますと、年号をとって呼ばれる安政の東南海地震がありました。ロシアの使節プチャーチンが下田で東南海地震の津波に遭って船を失い、伊豆の戸田で新しい船を作ってもらって移動しました。一方ではペリーの黒船がやってきました。大地震、津波もあったということで、嘉永7年という年の終わりごろに年号が変わって、安政という年号になりました。そんな時代風潮の中で、徳川政権の創立といえますか、江戸時代の始まりを象徴する関ヶ原合戦を描く作品が作られていたということが大変おもしろいです。

屏風に描かれている吉継は戦っている姿ではなくて、なんとなく敗戦を悟っていて周りに集まってきた兵士に指示をしているような、あるいは戦況を報告している家来たちの声に耳を傾けていよいよ最後の決断を伝えているような、そんな姿です。

こういった合戦図屏風のような絵画作品は、文字で書かれた合戦記類を参考にして、そこに書かれている武士たちの出で立ち、戦いぶり、あるいは戦果、その戦いの中でどんな働きをしたかというようなことを絵にしていくというやり方で描くわけです。

この関ヶ原関係の合戦記に大谷吉継がどんなふうに描かれている、あるいは書かれているのでしょうか。出で立ちについては、まず甲冑をつけておらず、乗り物に乗っています。これがまた輿だと書いてあるものと、駕籠のようなものと書いてあるものと、両方あると思いますが、いずれにしても馬には乗っていません。それから、ほとんど戦場での働きについての記載がなく、基本的には大谷は陣にとどまっていて家臣らの戦況を告げる報告に耳を傾けるというような形であります。そして最期の時を知り、自刃をし、最期の首は家臣の手によって隠し埋められて見つからなかったというストーリーで吉継と関ヶ原合戦というのは伝えられ、書かれているということになります。合戦記に大谷のことは必ず書かれていますが、基本的にはこういう流れで書かれていてどれも変わりません。ですから、それを絵にする、屏風にするという時もそういう情報の中で絵にしていきますので、結局こういう描かれ方になるのだということです。さらにもう少し細かく見てみますと、菊池容斎は吉継に浅葱の頭巾をかぶせて、そして白地に何か模様のある上っ張りを着せています。それから鎧のような赤い武具をつけている。また、脚の膝上につける佩楯^{はいだて}をつけています。それから顔のところ少し赤い色

が出ています。これは屏風に相当近づいて見ませんと、肉眼で見ることはなかなか困難なところですが、むしろデジタルカメラで高精度な写真をとってそれを拡大した方が意外と細かい情報がよくわかるようになりました。それで、顔の赤い色について、一つは頬ほおだてという朱色のものをあてている可能性があります。それからもう一つは、吉継がいわゆるハンセン病を患っていたというふうにいわれていて、そのことを描いている可能性もあります。それから白地の上着に何か模様が出ています。

2. 記しのこされた吉継

『関原軍記大成』という、宮川忍齋という人が書いた合戦記があります。江戸時代の半ばくらい、元禄期に書かれたものです。そこに、「吉隆(吉継)は其日、肌には練衣の二つ小袖、上には白布に村(群)蝶を墨にて書きたる鎧直垂を着て、朱の佩楯に朱の頬楯して、甲冑をばよろはず、浅葱の絹の袋に顔さしいれて、頬楯の下にて緒を結び、四方取放したる乗物に乗って、近習の兵士に昇かせたり。」とあります。容齋はこれを根拠にして描いた可能性があります。乗物は屏風を見ると駕籠のように見えますけど、近習の兵士に昇かせたといいふうに書いてあります。

また、『家忠日記増補追加』という資料がございます。これは松平家忠の孫にあたる松平忠冬が残した著作です。忠冬は、江戸幕府の直属の家来、幕臣です。家忠には『(松平)家忠日記』という名称で今はよばれる日記があります。家忠は、関ヶ原合戦の直前にありました伏見城の戦いで亡くなる武将です。上杉景勝が会津で兵をあげた時に、徳川家康は伏見城を出まして、会津に向かいました。その時家康の留守を守る形で鳥居元忠をはじめとする家康の直臣たちが伏見城を守っていました。そのうちの一人が松平家忠です。『家忠日記』は主に三河での出来事が中心ですけれども、彼が死ぬまでのいろいろな情報を記しているものとして重要な日記です。その日記が途絶えた後、孫の忠冬が聞き書きなどをもとに、日記の追加というかたちで著したのが、『家忠日記増補追加』という書です。そこには「吉継六百余騎本陣を去らず屯す、吉継態と鎧ハ着せず、戦急にして叶わざる期に望(臨)ハ、馬上ニ於(て)自害せんが為なり。」とあります。吉継はこの戦いが負けということがわかって、いよいよ最期を迎える時には馬上で自害したいと思っていたからこういう出で立ちにしたのだという説明になっております。だいぶ時間が経ってからの記録で、結果がわかった上で書いた資料ということですので、その点ではどこまでその時の情報を正しく記録しているかというのはわかりませんが、先ほどの合戦図屏風との関係でいえば、大変密着した資料とっていいと思います。こういう形で文字資料を根拠にして絵が描かれるのだということを確認しておきます。

さて、大谷吉継というと、ほとんどが関ヶ原合戦のエピソードをもとに彼の伝記が作られてきました。あるいは大谷吉継はどんな人かと問われて、こういう人と答える時も関ヶ原合戦がもとになります。それは、他のことはあまりよくわからないということを表していると思います。ですから、結局こういった屏風や合戦記のようなものの中で、大谷吉継が最期を遂げる姿が極めて立派であるというところから、吉継像というものが作られてきているということがわかります。虚像と実像というテーマを立て、吉継は一般にはこういうふうには伝えられているけれども実はそうではないのだということを書いて得意気になっている人もいますが、そういう人を私はあまり信用していません。虚像も含めてとらえていかないと、人物像というのは見えてこないのです。たとえその実体と違う形で伝

えられていたとしても、それは非常に長い時間の中で淘汰されなかったわけです。つまり、ある程度の社会的な合意というオーバーカもしれませんが、吉継がこういう人だということを信じる気風なり、そう伝えたいという想いなりがずっとその人の死後何百年も続いてきているということは事実ですから、その事実を含めて人物に近寄らないと、大谷吉継という人がどんな人であったかということに本当に近づけないのではないかと考えます。しかし、歴史家の仕事は当時の一次資料だけで史実を確定する努力をすることです。一次資料ばかりにこだわってもたいした成果を得られないと思ってもいますが、これからご紹介するのはそのいわゆる一次資料といわれるような、歴史学の中で比較的信頼がおけるとされている資料を使って組み上げた大谷吉継像ということになります。

3. 一次資料から見た吉継

現在生きている我々であれば、とりあえず役所に行けば自分の生年月日はわかるということになっています。出生届というものがありますので、生れた時の記録をわれわれは持っています。しかし戸籍のない時代は当然のことながら多くの人が生まれた時の記録を持ちません。それこそ江戸時代でも生まれながらの将軍でもない限り、何月何日の何時に生まれたという記録が残っている人は本当に少ないわけです。大谷吉継などのように、一代の英雄という形で歴史に登場してきた人というのは、当然どこでどういう形で生まれたかということとはわからずに、その人が成長して歴史に名を顕して死ぬ時の記録がなんとか残ったということでございます。歴史上の人物のほとんどは、死ぬ時に何歳だったという記録をもとに逆算して生まれた年を出しています。大谷吉継については、古くは関ヶ原の合戦記類に、死んだ時に42歳だったと書かれているものがいくつかあります。そこから逆算すると、1600年から41引いて1559年、永禄2年に生まれたのではないかというふうにいわれていました。ところが近年、近年といっても30年以上前ですけど、永禄8年説が出てきました。京都吉田神社の神主家の日記で、吉田兼見という神主の日記を『兼見卿記』^{かねみきょうき}という名で呼んでおります。その『兼見卿記』に、天正20年（文禄元年）の正月に吉田神社のおまもりを、母親のお東が息子の分も一緒にもらうという記載があります。その時に「東の御息、刑部少輔二十八歳」と息子の年が出てきます。これは大変重要な情報だということで、岡本良一さんが多分初めて紹介されたかたちで出てきたのが永禄8年説でございます。東が吉継の母親であることが確定してくる中で、こちらの説が現在では有力であるというふうに思います。ほとんど決定と言ってもいいくらいです。この永禄2年と永禄8年の違いは、石田三成と吉継の関係について考える時に大きな意味を持ってきます。石田三成は、永禄3年生まれということで、これまでは1年差ではありますけれど、吉継の方が年長であるというとならえ方の中で三成と吉継の関係を語ってきました。ところが永禄8年になりますと、三成が5歳年長になるのです。そうすると、やはり吉継と三成との関係について考える場合、前提が変わってくるということがあります。そういったことで、永禄8年説が出てきたということは大変重要なことでございます。

死んだ時ははっきりしてしまして、慶長5年の9月15日、関ヶ原の戦場ですね。これを西暦に直しますと、10月21日ということになります。太陽暦では10月21日が命日ということになります。関ヶ原の戦場で命を散らした方々を今でも慕うみなさんが吉継のお墓を訪れています。私も年何回か行き

ますが、生花が供えられていない時はなくて、命日ということで9月15日に行かれる方もたくさんいらっしゃいますし、一方で10月21日にこだわって行かれている方も多いと聞いております。

吉継の母である東は、秀吉の妻であるお祢、高台院つきの侍女です。その高台院の侍女としては孝蔵主こうぞうすが有名ですが、その孝蔵主の次くらい、あるいは格としては並ぶくらいでお祢つきの侍女としての活動をしている女房、女官です。東の出自はわかりませんが、いくつかの資料に、コヤ（小屋）の母親が東だとあります（『九条幸家日記』など）。そして、大谷吉継の妹がコヤとする資料が出てきました（『華頂要略門主伝』）。その二つの資料をあわせて、コヤも大谷吉継も東という人の子どもだということがわかりました。その上で『兼見卿記』に、さかんに「東殿息刑部少輔」と出てきます。しかし残念ながら「東殿息刑部少輔」と書いてあるだけではその刑部少輔が吉継であるという確実な証拠にはなりません。刑部少輔という官職の名前で呼ばれるという人は同時代に複数います。『兼見卿記』の中にも全く別の苗字を持つ刑部少輔なる人物が出てきます。そういう点では「東殿息刑部少輔」というだけでは決定的な証拠にはならなかったのです。しかし、今、お話ししたように、別の信頼すべき資料に大谷吉継の妹コヤが出ているということで、吉継の母親は東であるということが確実なのです。

一方、父親についてですが、古くは吉継が豊後の大谷盛治の息子だといわれていました。今一番権威のある歴史辞典である、吉川弘文館の『国史大辞典』も、この説によっています。しかし、これは成り立つことはないだろうと思います。『国史大辞典』も完結してから20年くらい経ちますかね。編集作業は多分80年代の初めか70年代の終わりくらいです。私がまだ学生の頃に出始めていますから、そういう点ではもうだいぶ古い説になります。さらに遡って『姓氏家系大辞典』というもっと古い書籍もその説を紹介しています。

しかし、他の資料との整合性等を考えますと、なかなか難しいだろうという話になって近江の大谷吉房説が出てきました。余呉町に、「小谷」と書いて「おおたに」と読む地名がありますが、その出身だという地域の伝承があります。そして一方で、近江に大谷という武家がいる。大谷という武家はそこら中にいるので、そういう意味では簡単には結び付かなかったはずなのですが、結びついてしまいました。

もう一つは青蓮院の坊官・大谷泰珍説です。青蓮院というのは延暦寺の門跡寺院でございしますが、坊官に大谷家というのがあります。吉継が大谷の家系であるという系図が、江戸時代に編纂されました『華頂要略』という青蓮院の寺史に出てきています。信頼できる寺の記録に出てきているので可能性が高いのではないかとということで、外岡が言い始めた説でございします。今、これが、生き残れるかどうかということですが、一生懸命やっているところです。ちなみに福井藩士の大谷助六が吉継の子孫という伝をもっています。助六は襲名で、重政、重照という実名がその後つくのですが、そのことが『諸士先祖之記』しよしせんぞのきという、福井藩の記録にあります。この時代、藩士の系図や家の歴史を示すような古文書を集めてまとめるという作業があちこちで行われました。例えば、有名なところでは、島津の『薩藩旧記』さつばんきゆうき、毛利の『萩藩閥閥録』はぎはんぼつえつろくで、その手の資料が福井藩でも作られたということです。あるいは細川だと『綿考輯録』めんこうしゅうろくというのがあります。こうした資料は案外使えます。同じように、江戸幕府も、もっと大規模に、『寛永諸家系図伝』かんえいしよかけいずでんとか、『寛政重修諸家譜』かんせいしゅうしよしよかふといったような大名旗本家

の系図類を編纂する事業を行いました。そういう中で、『寛政重修諸家譜』の時は、編纂用に集めた資料を別にまとめました。『譜牒余録』^{ふちょうよろく}といます。そういった形で江戸時代になってからそれぞれの家でまとめて出した資料が一堂に会していることによって案外、便利に使えるタイプの編纂物がいくつかありまして、その中にもかなり正確な情報が残されていることがございます。福井藩士の大谷助六家の系図と同じ系図を『華頂要略』が載せております。お互い交渉関係があったかもしれませんが、『華頂要略』の大谷家の系図にも福井藩士の大谷助六の名前が出てくるということです。ですから、福井藩士の大谷が大谷吉継の血筋をひいている可能性があります。若干、系図の兄弟関係とかは違って、吉継の孫ではなくて、吉継の甥ぐらいになるところに大谷助六が出てくるというぐらいの違いがある程度です。要は、青蓮院の坊官家の大谷家の血筋をひくものが福井藩士になっているということを少なくとも江戸時代の青蓮院は認めているということです。その『華頂要略』の情報と『諸士先祖之記』、これは福井藩士の大谷家が自己申告したものですけど、その自己申告の情報とぴったりあっているということは重要だろうと思います。私が大谷研究をしているということで、実は自分は大谷吉継の子孫ですという方が3～4人私のところに来ています。いろいろな資料を見て、これが末裔である証拠ですという話をおうかがいするのですが、実は福井藩士のお宅については全くわかっておりません。やはり本家の方が奥ゆかしくて、自ら名乗りでてこないのかなと思っています。

それから吉継の娘は、真田信繁、幸村という名前でもおっている有名な武将の奥さんになっています。大助という長男がいますが、これはその2人の間に生まれた子だといわれております。

吉継の子息としては大学助という名前が出てきて、どうも吉治が実名ではないかという人物がおります。

それからまた、家族関係を知るきちんとした資料として一つ紹介しているものが太宰府天満宮におさめられております「鶴亀文懸鏡」^{つるかめもんかけかがみ}でございます。これは文禄2年に吉継が奉納したという刻銘がありますので、疑う余地がありません。その疑う余地がない刻銘の中に「東／小石／徳／小屋」という4人の名前が出てまいります。福岡市の指定文化財になっていて、インターネットでも写真くらいは見るができます。東は母親、小屋は妹で、小石と徳がどういう人かわかりません。奥さんか娘か。小石と徳というのは、女性ではないかと思えます。こういうふうにならぬ4人の名前が出てきて、2人は確実にわかっています。こんな家族関係が復元できています。

吉継の幼名としては「慶（桂）松」という名前が度々登場します。吉継の通称は「紀之介」です。署名文書でも「紀之介」と署名しているものがいくつかあります。天正13年にルイス・フロイスが、イエズス会の日本布教の責任者であるコエリヨに従って秀吉を表敬訪問した時に、「紀之介」という人物が接待役に出てきたということをフロイスは書簡で報告しております。「紀之介」という名前が出てくるということです。一般に吉継を大谷刑部といわれる人が多いですが、これに関しては、天正13年7月に秀吉が関白になった時に五位クラスの任官も行われまして、その時に刑部少輔源吉継と名乗ったということが知られています。

吉継は、青蓮院坊官系図、あるいは近江の大谷家の系図に出てきます。それぞれ、在原氏、あるいは高階氏として大谷家が出てまいります。在原業平の息子が高階家に養子に入ったので、高階の系図と在原の系図が交錯します。その関係で後の時代も在原系図といたり、高階系図といたりするの

ですが、結局は同じ人物から出ているので合体して交錯している形になります。しかし、いずれにしても、従来、吉継は高階や在原、あるいは平氏の系譜をひくものだといわれています。豊後大谷家は平氏です。しかし、この段階で源を称します。これはやはり武家だから源と称したんだろうと、非常に単純に考えておけばいいと思います。氏が変わったということです。秀吉はもともと関白になった段階では近衛の養子になって藤原をもらい、藤原秀吉になる。しかし、藤原では、今までの系譜をひいているだけでつまらないので豊臣という新しいこれまでにない氏を考えさせて豊臣を名乗るわけです。ですから、そういう意味ではこんなことも同じようにおこなわれたのかなと思っていますけど、いずれにしても源と称したのは大事なことの一つです。

4. 秀吉政権のなかの大谷吉継

次に、大谷吉継が秀吉政権の中で武将としてどんな実績を残しているのかということをお話しします。一番初めの資料として確認されるのが、天正11年4月に、賤ヶ岳の戦いにつながる岐阜の神戸信孝を攻略するための戦いの中で、秀吉の意向を受けて吉村という武将に作戦指示をするという内容の文書です。その後も秀吉側近の奉行衆の一人として活動していきます。これが吉継の生涯を通した役割となります。それから敦賀城主として天正17年から関ヶ原合戦までおります。これが二つ目の彼の役割になります。一般に敦賀5万石といわれますが、敦賀郡はだいたい江戸時代を通じても2万1千石ぐらいです。ですから5万石には足りないもので、現在の南越前町や越前市の領域まで含めてほしいそこで3万石確保して、全体で5万石ということです。古代の敦賀郡が蘇ったかのような領域になります。それから小田原の陣から奥羽検地です。これは小田原で北条氏を屈服させた後、奥羽地域の検地と領知割を行います。その奉行として日本海側は吉継、太平洋側は石田が中心となって行っていくわけです。上杉景勝との交流もあったのがこの期間になります。それから次に朝鮮出兵です。いわゆる文禄の役と呼ばれている1回目の出兵の時、石田三成、増田長盛と並んで、作戦参謀というかたちで朝鮮半島現地に渡海しました。2回目の出兵（慶長の役）には渡海はしませんでした。これは病との関係があると想像しています。そして関ヶ原合戦で死にます。これが、ざっとした経歴です。

逸話としては、吉継は先ほど紹介した屏風や合戦記録、合戦記のようなものでもそうですが、江戸時代の中期以降に、理想的な武将大谷吉隆という名前でも再登場します。ですから、場合によって小説類に大谷吉隆という名前で紹介されることがあるかもしれませんが、それはそういう事情によります。描かれ方としては、石田三成と対照的です。三成という人は武将としてのエピソードに大変乏しいのです。きれいな官僚であるということ間違いなし、実際もそうだったと思うのですが、大谷との違いは何かというと、エピソードがないということです。失敗した話は知っていますが、成功した話は聞いていません。武将伝が生まれるのは、いわゆる武勇伝というか、首をいくつとったとか誰を倒したかという、そういうタイプの話と、もう一つは竹中半兵衛みたいな戦略家です。竹中半兵衛も命の取り合いの戦場の中で活躍したという話の一つもなく、武将として名をあげているのは彼のいわゆる軍師としての仕事です。そういう意味ではそのどちらかがあることが求められるわけですが、残念ながら三成の場合はありません。吉隆という名前でも出てくる吉継については、関ヶ原での活躍がまずあります。関ヶ原の合戦記では石田軍の動きももちろん出てくるけれども、そのことがの

ちのち、理想の武将像として三成を称えるような話としては整えられてこないわけです。

吉継と似たような人物は、やはり真田です。真田信繁も同じように、幸村という名前は彼が生きていた時はないです。ところが、死んでから、真田幸村という名前でも有名になってくるわけです。そのだいたい時期としては江戸時代の17世紀の後半以降、1600年代の後半期以降です。それは、関ヶ原合戦を見聞きした世代が死んだ後にあたります。江戸幕府が確立してきている時代で、戦争というものがなくなっています。1660年代以降、年号でいうと寛文・延宝という時期ですが、いわゆる太閤検地にかわるような新たな検地とか、幕藩体制の基本構造みたいなものが整えられてきました。「寛文印知」といいますが、各大名の領地目録がしっかりと整備されて一斉に配られます。そういうことが行われてくるのがその時期です。しかし、その時期は、関ヶ原を実体験として知っている人はもう世の中にはほとんど生きてはいません。要するに戦後70年みたいなものです。そういう時代に多くの侍たちは刀の代わりにそろばんを持ったり筆を持ったりして公務員みたいな仕事をしてるわけです。しかし、自分は一応侍だと思っています。だから、本来の侍はどうあるべきだろうと追憶的に考えるようになった時に出てくるのがこの人たちなのです。しかも、徳川に反抗して滅びていったということで、大変人気があります。むしろ大谷吉継の、今日のテーマであります、「乱世に義を貫く」というような話がこの時に作られて、強調されていったのだと思います。実体はどうだったのかということについては、本当は義を貫いていたのではないという可能性だってもちろんあるわけですが、それをこれから少しお話ししようと思います。

秀吉政権のなかの大谷吉継の業績をもう少し細かく見てみようと思います。全部読んでいないので、責任を持った発言ではないのですが、小説類でも、よく大谷吉継というのは五奉行に次ぐような位置にあるといわれます。石田三成に代表される、いわゆる吏僚派と呼ばれる官僚集団の一員です。それといわゆる武断派と呼ばれる福島正則や、加藤清正といったような人たちの派閥争いみたいなものが大きな前提となって関ヶ原合戦は起こっていく、また、あるいは秀吉が死んだ後の権力闘争の一つのかたちを決めていくという説明の仕方が大変よく行われていると思います。そういう中で五奉行という、これは本来は秀吉が死んだ後の体制をいう場合の名称ですが、そこにつながっていくような人たちがいます。石田、増田、長束、浅野、前田（玄以）といった人々は、秀吉の生前に秀吉が出した朱印状を先方に届ける、あるいは添状というのをしたためて使者に届けさせるような立場になった取次ぎ役みたいな役割になった人たちです。その秀吉文書の目録を作ってそれぞれどのくらいの文書が確認できるかという情報収集を20年ほど前に名古屋大学教授の三鬼清一郎さんが行いました（表1）。もちろんその当時の集め方ですから限界があるけれども、だいたいの傾向は見えるわけです。中でもやっぱり石田、増田が、そして次に長束あたりが突出しています。それから右筆衆である木下吉隆もかなり多いです。右筆というのは書記官です。自分が書いたものをそのまま取次ぎで持って行って、秀吉から預かった口上を一緒に述べるというような、そういう役割をします。大谷はやはりぐんと低いです。黒田孝高（如水）などよりも低いです。ですから五奉行に次ぐといわれても、まあ、そうかなとも思いますが、実際にはそんなに秀吉の朱印状を取りつぐような仕事というのを盛んにやっていたわけではないのです。

先ほど申し上げた、吏僚派と武断派という関ヶ原合戦を前提として秀吉家臣団をとりあえず二つ

にわけてみようという場合に、大谷は吏僚派なのかどうか。大谷吉継発給文書は全体を調べてみますと、今100通くらい集まっていますが、その中の40%ほどが朝鮮出兵です。先ほど、実績のところ、奥羽仕置と朝鮮出兵と敦賀城主と三つありましたけれども、そのうちのひとつである朝鮮出兵関係が半分くらいを占めます。残りの20%くらいずつを、敦賀城主と、頻りに秀吉

表1 豊臣秀吉発給文書伝達者（添状）

人名	署名	総(概)数	備考
石田 三成	左吉、治部少輔	270	五奉行
増田 長盛	仁右衛門、右衛門尉	260	
長束 正家	新三郎、大蔵大輔	220	
浅野 長政	長吉、弾正少弼	140	
前田 玄以	民部卿法印、徳善院	90	
大谷 吉継	紀介、刑部少輔	70	右筆衆
木下 吉隆	半介、大膳大夫	310	
山中 長俊	橋内、山城守	180	
黒田 孝高	官兵衛、勘解由、如水	80	

(三鬼清一郎「豊臣秀吉文書の概要について」名古屋大学文学部研究論集131、1998年による)

のところ贈り物が来るのに対して礼状をしたためるといったものが占めます。そして奥羽仕置が12%ほどです。ですから、石田、増田との相違ということでは、配布資料に特命奉行的役割と書いておいたのですが、特定の事案についてだけ、吉継は関わり合いを持つというような関わり方での、奉行といえば奉行だったというような位置づけができると思います。石田、増田は秀吉政権の諸案件全般に関わるわけですから、それに対して大谷はそうではなくて敦賀城主という立場で、奥羽の検地であるとか朝鮮出兵というところにポンと出てきて仕事をするという、そういう役割を与えられているということが見えてきます。

しかもその時に見逃してはいけないのが、基本的に奥羽仕置も朝鮮出兵もそれぞれ石田と一緒に出ていっているということです。これは私の考えですが、秀吉が、石田という人物を外に出す時に心配だから吉継もつけておこうという、秀吉一流の人材配置ではないかと思っています。つまり、石田というのは、時に秀吉の思惑を越えた行動をできる力を持っているし、実際それを時々やって秀吉に叱られているわけです。そういうふうなことで、石田が秀吉の側にいて何かやっつる分には、何かあれば秀吉がすぐ対応できるわけです。ところが奥羽や朝鮮半島では、なんとか石田を独断専行させない仕掛けが必要で、そういう中で選ばれていったのが吉継だろうと思っています。

その象徴的な話であるということで、朝鮮出兵の文禄の役の時の吉継の働きをご紹介します。この時、緒戦はどんどん勝ち進んで、朝鮮半島を北へ北へ行っていて、明まで行こうという作戦の中で動いています(図1)。加藤清正はどんどん半島を北上して、のちのち清国を創っていくことになる女真族のところまで、戦いを挑んでいきます。それぐらい勢いがあつたのですが、明軍が本格的に李如松という将軍を中心に反撃に出てきた時に、日本軍は一転負けつづけます。李如松が平壤を攻撃をした時に小西行長がいたのですが、撤退をして開城まで逃げていきます。その時に大谷たち奉行衆は開城や開城周辺にいる残留部隊を漢城まで全部撤退させて、朝鮮半島にいる日本軍を集結させて明軍と戦おうという戦略を打ち出しました。ところがやっぱり負けず嫌いの武将たちというのはなかなか言うことをきかないわけ



図1 「朝鮮出兵」関連地図

です。長老格の小早川隆景も結構いい年で、そろそろいい死に場所を探している人なのですね。だから、ついついがんばっちゃう。それを説得に行くということで最初安国寺恵瓊が行きますが、失敗します。安国寺という人はなかなかの策士で、いろいろな戦略に関わるのですが、肝心な時にうまくいかなくて、この時もうまくいきません。それで奉行衆が協議して、吉継が出向いて隆景を説得するという話になります。漢城まで撤兵させて、その後、碧蹄館ビョクジエグアンの戦いで、日本軍は勝利をおさめて李如松も傷ついて撤退をして講和へのラインが生まれてくるという、非常に重要なところで大谷が出てきて説得をしました。隆景も吉継が出てきたので渋々説得に応じたという話が毛利や吉川の記録に出てまいりますし、黒田長政の記録にも吉継の名前が「弁舌よき人」ということでしっかり書かれています。さらにその後、国枝清軒がまとめた『武辺咄聞書』ぶへんばなしききがきとか、ずっと後に出た武将のエピソード集として代表的な存在である湯浅常山の『常山紀談』じょうざんきだんなどにもこの話が採用されています。

つまり、吉継の武将としての姿を伝えるエピソードは関ヶ原合戦の話が特に先行して有名ですけど、朝鮮出兵の話にも必ず登場するということです。これはまさに吉継の面目躍如たる場面であって、『毛利家記』や『吉川家譜』、『黒田長政記』などの武家の家伝記録にも刻まれた活躍です。これらは、黒田家、吉川家、毛利家の基本的な家の記録ですから、その中で黒田や吉川や毛利が大谷の説得に従ってこっちへひいてきたと書いているということは、それぞれの武家の中で末長く伝えられた話だということがわかります。武家一般や庶民に読まれた武将のエピソード集に出てくるだけではないというところがおもしろいというふうに思います。

5. 関ヶ原合戦への道

慶長3年に秀吉が死んで、関ヶ原合戦に近づいていきます。関ヶ原合戦の前提として忘れてはいけないことは、関ヶ原合戦の段階では石田三成は政権中枢にはいないということです。政権中枢における家康と三成の権力闘争から関ヶ原合戦になったのではなくて、もうすでに家康が勝って一旦決着がついて、三成は政権中枢から遠ざけられているわけです。その遠ざけられている人物が復活を図り反撃してきたのが関ヶ原合戦という位置づけになります。秀吉の生前に石田三成の行状に対して様々な反発をしていた黒田長政や京極高知、細川忠興らが、三成をやっつけようとして襲撃を試みました。慶長4年閏3月のことです。その時に三成は家康の屋敷に逃げ込んだというのが本当かどうかということについては今議論があり、おそらくは誤りだということですが、それはともかくとして、その結果、三成が失脚して佐和山に隠棲します。ですからその後は家康主導の豊臣政権です。一応秀頼の存在は認めているけれども基本はすべて家康が決めているという状況です。そういう中で、最近の論文では、吉継は政権に復帰していたといわれています。これはまだ検討の余地があると思いますが、いずれにしても宇喜多家内部の権力闘争である宇喜多騒動の調停に吉継が入っているのは事実のようです。それから庄内の乱です。九州の島津家の御家騒動で、家来の筆頭格である伊集院という一族が島津に反乱を起こしています。これの調停のためにやはり家康の指示を受けて吉継が間に入っています。そして最後は会津出陣です。上杉景勝が挙兵したのを家康が聞いて会津に行く時に、吉継も基本的には行こうとしました。秀吉の死後、家康主導になっていることは間違いなさそうです。吉継がある程度そういう状況を受け入れて家康の指示を受けて一定の役割をしています。対して、三成の立場とい

えば、完全に失脚しているわけです。そういう立場の違いがここでは鮮明になっています。その後の関ヶ原に至るまでの道の中で、ここは見逃せない点です。

表2 関ヶ原合戦直前の石高一覧

人名	居城	石高	人名	居城	石高
石田 三成	近江佐和山	194,000	徳川 家康	武蔵江戸	2,257,000
増田 長盛	大和郡山	200,000	井伊 直政	上野箕輪	120,000
長束 正家	近江水口	50,000	榊原 康政	上野館林	100,000
大谷 吉継	越前敦賀	50,000	本多 忠勝	上総大多喜	100,000
			松平 忠吉	武蔵忍	100,000

三成がいよいよ家康を討つという話をした時のエピソードを『落穂集』でみておきます。「其元手前と義ハ、一向の小身者にてこれあり候、故太閤の御取立をもって大身に成りあがり候と有ハ諸人よく存たる儀なれハ、公儀の御威光を以て人々上へ計ハ尊敬いたすごとくこれあり候ても、底意に於てハ左様これなく候あいだ」とあります。吉継、三成なんてのは小身者であると言っています。小身者というのはこの場合、禄が少ないということです。石高を見ていただければわかるように、三成が19万4千、増田が20万、大谷が5万です(表2)。奉行衆(西軍)を全部あわせても50万石くらいです。一方、東軍は徳川だけで226万石です。その家臣にあたる人たちでも計40万石を越えています。石高の差は、軍勢、軍備など、全部に関わってきます。しかも、秀吉がいての我々であって、秀吉がいるから三成あるいは吉継の言葉を聞いたのであって、秀吉がいなくなったら自分たちの言葉なんか誰も聞かないぞと言っているわけですね。吉継のセリフは創作でしょうが真実を語っています。

6. 関ヶ原合戦

次に、大変有名な、吉継が三成を説得するところをみましょう。福井県立図書館保管の松平文庫の書籍に『慶長見聞書』という本があります。『慶長見聞書』の名でいくつか伝来している本があるようですが、今回は松平文庫本を使わせていただきました。慶安4年に、浅羽成儀が書いたものを松平春嶽が明治になってから写したという奥書があります。『慶長見聞書』によれば、吉継は会津に下るつもりで移動していて、その移動中に関ヶ原の隣の垂井で、石田三成から佐和山に呼び出され、佐和山で説得されます。「天下は内府の物に成へし、諸事太閤の御政に背のミならず、秀頼公を蔑如す」とあります。三成は吉継に、家康となんとか戦わなければいけない、というような説得をします。次に「刑部聞て、更々不思議なる次第二候、貴殿ハ諸人に悪れ、既ニ切腹の時、某種々の方便をなし家康に申、今迄無事成」とあります。吉継は三成に、「三成が襲われて失脚する時に本来なら切腹だったのだけど、自分が家康に申して、とりつくろったから無事なんだぞ。」と言っているのです。これは、福島正則たちが三成を襲ったとき、吉継が家康と相談して、三成の処遇を決めたことをいいます。さらに、「今また事をおこせば、去年、(福島正則たち、)三成を襲った連中はもう全部敵になってしまう。しかも家康は300万石に及ぶ大名で、家来も多い。秀吉政権を受け継いでいるのは家康である。しかも彼は人からも慕われているが、あなたは小さな身代で人からも思われていない。だから自分が病気の身をおしてはるばる会津まで下ろうとしているのはひとえに家康と景勝の取り持ちをして戦いを収めようと思っている。」と言うわけです。ところが三成は聞きません。三成は「今度の思い立ちは全く自分のためだけではない。君(秀頼)のためがんばる。」と言い、その後も、いろいろと議論が

ありました。三成は、「自分は直江兼続と申し合わせをして動き始めている。今自分が兵を起こさなければ景勝だけを悪人にして終わってしまうのではないか。」ということも吉継に語りました。最終的に吉継は三成に同意します。三成は失脚していて吉継はまだ政権の内部にいるという状況の中で、今度は吉継が走り出します。

吉継の計略について、先に結論を申し上げます。東海道を家康の軍勢が参ります。東山道を秀忠の軍勢が参ります。秀忠の軍勢が真田に関わっている間に関ヶ原に間に合わなかったというのはよく知られていますが、実はもう一つ、前田利長が北陸で軍勢を整えて、西上をしていました。結局前田の軍は大谷が止め、秀忠の軍は大谷の娘婿の真田が止め、結局関ヶ原に間に合ったのは東海道を来る家康軍だけというシチュエーションを作りだしたのは吉継だったのです。

資料(表3)の「北陸の関ヶ原」というところですが、前田軍が動きはじめた慶長5年7月26日、家康は下野小山におります。8月1日に伏見城が落ちます。ところが進軍は止まりません。黒田如水はその間、中川秀成に、「大谷が伊勢・江州境目に城をつくってそこの大将になるらしい」という書を送っています(『中川家文書』)。情報時差で、7月末のこの辺の動きを知らない中で情報を得た黒田如水がこういう情報を与えたということですが、これは実際には起こりません。作戦としてはあったかもしれませんが、現実には越前に行っています。前田利長は、小松城を最初攻めようとするのですが、丹羽長重の小松城はなかなか難しいだろう、ということで素通りして、大聖寺の山口宗永の城を攻めて落とします。山口らは自刃します。ここでいよいよ北ノ庄にいた青木一矩がビクビクしてはやく助けにきてくれと言ってくるわけです。残された資料の中には、あんな臆病なやつを北ノ庄に置いたおかげで苦労すると書いてあるものもあります。細呂木を越えて金津まで来て現在の坂井市くらいまで来るわけです。先鋒は福井市の北部くらいまで、前田軍が侵入しています。ところがおそらく九頭竜川を越えるか越えないかくらいのところで反転してしまいます。なぜでしょう。伝えられる資

表3 北陸の関ヶ原

月日	動	静
7	8	(徳川家康が会津へ出陣、24下野小山に到着)
	26	(27日とも、前田利長・利政が金沢を發し加賀松任に出陣、小松城の丹羽長重を攻めんとす)
	30	大谷吉継、大坂より真田昌幸・信繁父子に豊臣秀頼への合力を勧む(→上田城攻防戦9/6~11)。
8	1	(伏見城陥落、焼亡、攻撃7/19~)
		(石田三成が北庄・青木一矩に返書を送り、加勢を約し、伏見城陥落を伝える)
		黒田如水が中川秀成に書を送り、伊勢・近江堺目に拵えた城の大将に吉継がなることなどを伝える。
	3	(前田利長・利政ら、小松城を通過し大聖寺城を攻撃、城主山口玄蕃宗永ら自刃)
		北庄城主青木一矩、大谷吉継に急を告ぐ。
	5	(前田利長・利政ら、4日細呂木を越え、5日金津に布営、先陣は五本(松)・長崎に至る)
	8	(前田利長・利政ら、兵を返し金沢へ向かう、帰路小松城の兵と浅井暁に戦う)
10	(石田三成が大垣城に入る、11日とも)	
22	大谷吉継が大聖寺に人数を残して大坂に向け発つ(23中途変更して美濃へ向かう)。	
23	(岐阜城陥落、織田秀信降伏)	
	(呂久川で黒田長政・藤堂高虎らと石田三成・嶋津義弘ら対峙、三成らは大垣へ、24長政らは渡河す)	
9	1	(徳川家康が江戸を發し神奈川に進む)
		大谷吉継が北国勢を集めて敦賀を立ち関ヶ原に着く。

料では大谷吉継が前田利長の義弟を捕えて、偽の書状を書かせたとあります。その書状には、「大谷軍として今、その北ノ庄に向かっているのは、軍勢のうちの三分の一くらいで、三分の二くらいの軍勢は、水軍でもって、ずっと大回りして、利長のいない金沢を襲うぞ。」と書いてあります。それが届いて利長は手をひいたということになっています。情報戦を制したということです。実際本当にそうだったかというのはわかりませんが、江戸時代は間違いなくそう信じられていました。ですから前田家（加賀藩）では江戸時代、軍学者を動員してあの偽物の文書を前田利長が信じたということはないというふうに否定しようとするのですが、できないのです。その辺の記録も全部残っています。加賀藩の記録です。記録っていうのはいいですね。いいことも悪いことも全部残してくれます。そうでなければ記録になりません。そういうふうなことで、結局前田軍の進軍はとまりました。その間に石田三成は大垣城に入って、家康の軍勢を大垣城で迎えるつもりでした。そんな作戦の展望がこの時点ではあったのです。

ところが、徳川の前鋒部隊は8月20日には清州城に集結して、木曾川を渡り、岐阜城を落として24日には呂久川（現在の揖斐川）のところまで進軍しているのです。彼らは勝ち続けているわけです。関ヶ原合戦というのは、単純にあの日申し合わせて西軍と東軍が集まって戦ったのではなくて、東軍の方の前鋒部隊の一番元気な連中というのがずっと勝ち続けてきたのです。関ヶ原に行かれた方はわかると思いますが、西軍の陣地から東軍の陣地はほとんど丸見えです。西軍の陣地の方が高いところにあります。高いところにいる方が有利だと思うのですが、負けてしまうのは、徳川の前鋒部隊の勢いがあるからです。家康は9月1日に江戸をようやく出ます。それで2週間くらいで先鋒と合流して美濃赤坂に着いた翌日に、関ヶ原合戦です。

大谷吉継は東軍の進軍を知り8月23日に北陸を去って、敦賀から関ヶ原に向かうのは9月1日くらいです。これはおもしろいですね。家康が江戸を発ったかなというぐらいの時に大谷吉継は既に中山道の要所に陣をかまえていたということです。しかもまだ大垣城に石田はいるわけですから、関ヶ原での戦いになるかどうかかわからない状態です。

実際、慶長5年9月1日、家康は江戸を出る日付で真田信幸に書状を送っています（写真2）。真田昌幸と信繁は西軍につき、信幸は東軍についていました。真田昌幸の長男が信幸で、次男がいわゆる幸村、信繁です。その東軍につく、信幸宛ての書状には、「自分はこれから江戸を発つ、大垣城は水攻めにしてやる」とあります。大垣城は天正地震の時に水没している城ですから、揖斐川の川を切って大垣城を水攻めにするというのは非常に有効な策なのです。実際には水攻めはないのですが。そういう計略でいるということは家康もここで述べているとおりです。一方、7月30日の真田昌幸・信繁宛ての吉継の書状には次のようになっています（写真3）。「秀吉死後の家康の態度は許せない。そこで、大坂城の西の丸の家康の留守居を全部出して、大坂城は全部自分たちのものになった。真田の人質は大谷が保護して秀頼を盛り立てたいから自分たちに味方してくれ。そして、伏見城は陥落間近である」と書いてあ



写真2 「徳川家康書状（吉7）」

真田宝物館所蔵

ります。石田も真田に対して手紙を出しています。少なくとも先ほど申し上げたように、北陸は大谷がとめた、東山道は真田がとめた、あとは家康の本隊だけであるということになります。

気になるのは京極高次です。結局京極は大津城に籠城して立花宗茂をはじめとする西軍の武将たちをひきつけて関ヶ原に行かせません。その結果、西軍も万全で戦えたわけではないという状況を作り出したというのをのちのち家康に評価されました。

高次は氏家行広室、京極高次の妹で松雲院という名前で伝わっているのですが、この女性を通じて大坂の方に味方するように誘われ、結局大谷に従い北陸に行きます。氏家行広はもともと美濃衆です。織田の時代からずっと秀吉にも仕えて、ということで最後は桑名にいますが、状況上仕方がなくて、どっちにつくつもりもなかったんだけど、西軍が来てしまったので、結局西軍について敗戦します。ただ生き残って、大坂の陣で死ぬという人です。それから朽木元綱です。前田軍を退けた時にこの朽木も大谷と一緒にいっています。京極も行っています。だから京極高次も朽木元綱も大谷と一緒に北陸に行っているのです。大谷がリーダーですね。ところが前田軍が帰り、大谷が関ヶ原に向かう時に、京極高次が私は一番最後から行きますと言って突然消えてしまうのです。これは吉継、最大の失敗だったかもしれません。関ヶ原の戦場まで連れてきて、それで戦い始めたら、途中で旗色を変えるのは難しいだろうからということで、まきこもうと考えていたと思うのです。朽木もそうです。朽木も小早川が裏切った時、一緒に裏切る人ですから。そういう連中をみんな一緒に関ヶ原に連れてきてしまおうとしたのです。それで戦いが始まったならなんとかなるだろうという戦略があったと思うのですが、京極は海津から舟に乗って大津に入ってしまった、籠城戦を始めてしまいます。石田三成と京極との関係もありよくありませんでした。秀吉が死んだ後、「三成は一人不興いたして、諸人見こり（懲、見せしめ）のために京極を攻めて腹を切らせる」というふうに言ったけれども、大谷がそれを止めたという話があります。ところがこの後、単身三成が礼を言いに大津城を訪問して、西軍に属したことに礼を言うということがあったらしい。『落穂集』が記している話です。

藤堂家に仕えた学者である植木悦の『慶長軍記』なども引用されている、^{こうざんこうじつろく}『高山公実録』という、藤堂高虎の一代記をまとめた津藩の資料があります。活字にもなっており、これはとてもいい資料です。ここにこんな話が引かれています。慶長5年9月14日、関ヶ原合戦の前日に内府公德川家康が岡山（美濃赤坂）に着いて、大将を集めて作戦会議をしました。そこで家康は黒田長政に、小早川秀秋が裏切るということを確認して、ひとえに長政の才覚、業績だと褒めあげます。ところが黒田は小早川秀秋は裏切ると言っているけれども、こういう戦の時には最後までわからないから、あんまり安心できないと言った。『慶長軍記』は黒田のことを誉めているのかもしれませんが。次に、脇坂安治は藤堂と旧友なので、使いをたて、味方させようとしたともあります。実際脇坂は小早川の裏切りに

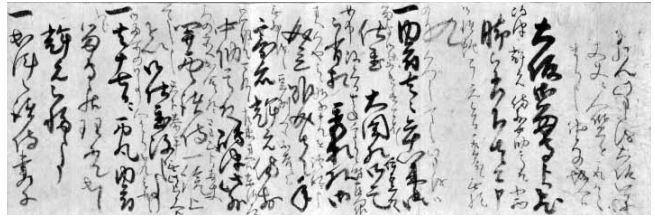


写真3「大谷吉継書状（吉46）」

真田宝物館所蔵

与同して一緒に西軍から東軍に寝返ります。その末裔が赤穂浪士の話によく出てくる播磨龍野の脇坂淡路守です。脇坂に今度は家康から指示があって、大谷吉継も味方にしたらどうかということで説得に行かせたのですね。脇坂は大谷のところに来て、自分たちへも、あなたのところへも、このように家康に味方しないかというふうに言ってきているけれども、あなたはどう思いますか、と言いました。大谷は、さては脇坂は裏切るなというふうに感じとったけれども、それを気づかないふりをして、「家康が言うように、『年来青眼ニ預リタル吾ナレハ、』青眼というのは青い眼で見てる、これは歓迎しているという意味です。歓迎していないと白い眼で見る、白眼になります。だから味方に参らねばいけないのだけでも、三成と一度約束したのに、今、家康の命に従うということは、裏切り者として侍の風上にも置かれなだらうから、命永らえてもなんの意味もない」と言います。要するに、脇坂の腹のうちを読んで、脇坂を批判しているわけです。しかし、「吾ヲ御用ニ立ツヘキモノ」と思ってもらったことはありがたいから、「死テモ草ヲ結ハン」、つまり、ありがたいと思いますよということを書いたというふうに書いてあります。これは、大谷ファンにはこたえられない、大谷の面目躍如の話です。実際そう言ったかどうかわからないですけど、少なくともそのように伝えられていたし、植木がそう書き残したのは重要です。藤堂は直接大谷軍と戦って一旦は負けているわけですからね。しかも、のちのち大谷の墓は藤堂が建てたことになっているわけですから、そういう意味でも、藤堂と大谷の関係は浅からぬところがあります。そういう中でこういう記録が残っていて、ご存知の方も多と思いますけれど、大谷の首を隠した家来といわれる湯浅五助というのは、藤堂家の一族に討ち取られているわけであります。そういうこともあるわけですね。しかも、湯浅が隠そうとした大谷の首の在りかというものを藤堂家は家康に明かさなかったと藤堂家は記録しています。そういう縁もあります。

7. 大谷吉継の死はどのように伝えられたか

『家忠日記増補追加』には大谷が馬上でもって自殺したというふう^{けいちょうねんちゅうぼうくさいき}に記録をされています。どうも馬上ってというのは想像できないですが。板坂卜齋が書いた『慶長年中卜齋記』という記録があります。板坂卜齋というのはもともと南禅寺にいたお坊さんだったのですが、武田信玄にヘッドハンティングされて、武田信玄つきの医者になります。その後、徳川家康つきの医者になります。ですから家康と一緒に行動しているということで、情報としては確かだろうという資料です。そこにも「大谷刑部少輔ハ合戦負に成て馬上にて腹を切られ候」という話^{けいちょうねんちゅうぼうくさいき}が書いてあります。『信長公記』などを書いている太田牛一の記録にも同じように書いています。しかし「卜齋は刑部煩にて盲目なれば合戦場へ乗物にて出、負になりたらバ申し候へと五助と申す侍に申し渡され、合戦負歟と再三尋ねられ候、五助未だと申し、必定負の時に御合戦御負と申し候ところ、乗物より半身出掛り首を打たせ候となり」とも書いています。これは卜齋自身による考察の部分です。馬上にて腹を切ったといわれていると書いてしまったが、よく考えてみると、太田の記録なんか^{けいちょうねんちゅうぼうくさいき}にそう書いてあるからそういうふう^{けいちょうねんちゅうぼうくさいき}に書いたけれども、本当かなというのです。多分これは正しい判断だと思えます。馬上での切腹は、あえて言えば事実^{けいちょうねんちゅうぼうくさいき}に反する伝説でしょう。こういう話が、江戸時代の17世紀以降、理想的な武将として吉継を押し上げていくエピソードが作られていく中で出てくるのです。吉継の死を悼み、魂を鎮める意図がある中で出てきていることだと思し、第一間違いなくそれは吉継の願望だったと彼らが考えているか

らだと思えます。少なくとも、事実はそうでないかもしれないけれど、伝えられる中では、そのように吉継の願望を果たさせてやろうという想いが、のちの人々の中にあつたということは大変重要なのだらうと思えます。

そこからまた翻って吉継が、関ヶ原合戦で自らは戦う機会はない。実際病をもって戦うことはできなかったと思えますが、そういう中で、関ヶ原合戦で武家大谷氏の歴史を草創するというふうに、自分自身で自己演出をしたなどという怒られるかもしれませんが、そういう意味合いも関ヶ原に込めたのではないか、というふうに思えます。というのは先ほど申し上げたように、私が考えているところでいえば、大谷家は青蓮院坊官家の出ですから、武家でもなんでもないので。秀吉などが典型的だと思えます。その秀吉が活着している間に、秀吉の出自はどこだという中で、祖父は萩中納言という貴族で母は宮中に仕えたみたいなのを言います。大村由己^{おおむらゆゑこ}という秀吉の近くにいたいわば御用学者がでっちあげた説なのですが、2、3代さかのぼったらわからないのです。黒田如水も、近江、京極の末裔だと称しているけれども、もう3代前から先はわかりません。江戸時代の大名たちはみんな系図を創っているわけです。そういう中で大谷の行動を見れば、やっぱり武家としての大谷家の歴史というものをここから始めようというような積極的な死に様というものをここで演出しようとしたということがあるのかなというふうに思っています。そのことがさらにのちのち、朝鮮出兵の中での動きなどにも光があてられ、社会的合意が江戸時代以降の人々のなかに形成されていくわけです。まさに、吉継伝説みたいなものができあがってきて、今でも「義に生きた武将」とか、「乱世に義を貫く」という今日のテーマのような形で形容されていく吉継の生涯というようなものが作り上げられてきたんだらうと思えます。

そういう意味では、多少、フィクションばい含みがあるわけですが、私などはこの大谷の意図をくめば、歴史を研究している者でありますけれども、少しだまされてもいいかなと思つているようなところがあります。そのことがあえて言えば、江戸時代以降、吉継を研究してきた人たちの共通の想いなのではないかというふうに思っています。どうも違うでしょ、違うとは思うけど吉継はやっぱり立派だったよねという話が入ってくるわけです。やはりそういうことが次々と出てくるところが吉継の幸福なところなのだらうというふうに思っています。

まとめますと、吉継というのはいろいろな虚像をまとわされている人物であるということは疑いないと思えます。しかし、そういった虚像というのもやはりその人をとらえてできあがったものです。たとえば小早川隆景が説得に応じたような、そういう記憶みたいなものが前提にあつて、少なくともその死後、数十年の間に評価が定着をするような、まさに歴史ですよ。「事実」が「歴史」になる時に、評価が入ってくるわけです。関ヶ原合戦の70年後くらいに、合戦記や伝記の作者たちは、大谷というのはこういう人物だったというふうに書いていく時に、事実関係の調査をしながら一生懸命、自説の正しさとか、説得力を増す努力をするわけです。何度も紹介してきましたけれど、松平忠冬であり、板坂卜斎であり、あるいは大道寺友山であり、あるいは植木悦であり、そういう人達は単にでっちあげでなく、調査をしながらやっているのです。今は見るできない資料を彼らは見たかもしれない。そういう中で築き上げていって大谷吉継という人物の姿を作り出した。それが結局、「義を貫く」というところに集約していって、理想的な武将として定着し、今でも人気の武将なのです。戦

国武将の人気ランキングということになればベスト 10 の常連というところまでくるのは、やっぱりその部分が大きいだろうというふうに思います。実像と虚像というものをある程度ミックスして、その中で歴史上の人物の評価をしていこうという時に、大谷というのは恰好の素材でもあります。また、大谷の子孫が、福井藩士として長く福井藩に仕えたということですから、福井県にも大変、縁の深い人物です。今後もお、研究を深めていきます。今ある大谷像というものをまとめていくと、結局最後はこういうところにまとまるのかなと思います。これで終了いたしたいと思います。

〔付記〕 本稿は 2015 年（平成 27）7 月 19 日に、福井県立図書館多目的ホールで行なわれた講演会「乱世に義を貫く－名将大谷吉継の実像－」の講演録を加筆・修正したものです。

